

# (3)コストフローの構造

コストフローが原価が計算されていく“過程”が見えるのは、コストフローには以下の重要な構造が組み込まれているからです。それは「データ受払構造」です。

この「データ受払構造」は“仕入”(原価材\*1+製造間接費)と“製品”の2種類があり、コストフロー上、各BOXがどちらの“受払”数量によってコントロールされているのか？が決まっています。下図では赤い点線が“原価材数量”のデータ受払、緑の点線が“製品数量”のデータ受払によって管理されています。この内赤と緑の丸が付された4つのBOXはこの該当する受払数量が、中央線の左右(貸借ともいう)で一致する(バランスする)構造となっています。

原価計算とは、この各BOXの“受払数量がバランスする”ことを前提として、借方の「入庫」原価から貸方の「出庫」原価へ、両者が金額もバランスするように分解計算することなのです。

そしてこの分解計算は原価材の購入原価をスタートとし、各段階(BOX)を次第に遷移しながら(矢印)、各在庫原価計算と売上原価計算へ到達します。

こうすることによって、当初の購入原価全額が各製品の在庫金額や売上原価に組み替えられていきます。

\*1「原価材」とは、SHINでは「仕掛」への投入となる元の最左列4つのBOXの原価要素グループの名前です。これに「製造間接費」BOXを加えて「仕入」タイプと呼びます。



※「製品」はの“進行段階”の違いで  
①加工途中の「仕掛」  
②完成後の「製品」  
の2つがあります

(参考)原価材と製品(仕掛)の受払

仕掛計算以降は「製品」の「受払」が重要です。「原価材」と「製品」の受払上の接点は「投入」です。この「投入」の場所で用意された「製品」の箱に各「原価材」が載せられていくイメージです。

特に原価計算を正しく行うためには完成した「製品」の受払記帳以外に、加工途中の「仕掛」の受払記帳が重要です。

